

TABLE FOR TWO かわら版 補足資料  
 ～Vol.8 ルワンダ視察報告～

ご担当者の皆様

日頃は TFT プログラム実施のため多大なるご支援を頂戴しまして誠にありがとうございます。支援先の視察報告レポート・かわら版をお送りいたします。ぜひ参加者の皆様の目に触れる場所に掲示いただきますようお願いいたします。また本資料は、かわら版だけでは伝えきれない支援先の情報を皆様にご覧いただくための補足資料です。貴組織内でのコミュニケーションや PR 等のご参考にして頂ければ幸いです。今後とも引き続きのご支援、何卒よろしく願いいたします。

【補足資料 Vol.8 をお送りするにあたって】

本年9月、支援先のルワンダへ視察に行つてまいりました。支援開始からおよそ3年間が経過し、支援先の地域では子どもたちの健康状態だけでなく、子どもたちの学習に対する姿勢、そして親たちの考え方で変化をもたらし始めています。今回の補足資料では、皆様にご支援による学校給食プログラムの舞台となっている小学校の制度、また給食を食べて無事小学校を卒業していった子どもたちが今後歩いていくであろう進路についてお伝えさせていただきます。

1. ルワンダ支援地域マヤンゲ地区

ルワンダにて TABLE FOR TWO (以下 TFT) が学校給食支援を行っているマヤンゲ地区は、首都キガリから 30 キロほど南へ向かった地に位置しています。マヤンゲ地区では、住民の大部分が農業に従事し自給自足に近い生活をしています。乾燥した気候が続き、土地があまり肥沃でないため、そのような過酷な環境に強いキャッサバを多く育てています。現在ではより現金収入の機会を得られるよう、また将来的に学校給食の原料も地元で生産できるよう、キャッサバを単に栽培して販売するだけでなく、キャッサバ粉として加工生産する工場も稼働し始めています。



TFT では、マヤンゲ地区に存在する小学校 5 校に通う、およそ 6,000 名の子どもたちへ給食を届けています。TFT が学校給食プログラムを開始した当初、マヤンゲ地区の小学校の就学率はおよそ 70%に留まっていた。しかしおよそ 3 年が経過した現在では、この地域に暮らす就学適齢期の子どもたちのほぼ 100%が、小学校に通うようになっています。

【マヤンゲ地区小学校別生徒数】

学校名	男子生徒数	女子生徒数	全校生徒数
Mayange A Primary School	791	670	1,461
Mayange B Primary School	550	535	1,085
Kamabuye Primary School	646	596	1,242
Muyenzi Primary School	707	704	1,411
Mboyo Primary School	285	301	586
合計	2,979	2,806	5,977

## 2. ルワンダにおける学校制度

TFT から給食が届けられている学校は、どのような仕組みになっているのでしょうか。ルワンダでは、2010 年の国家予算のうち 17% が教育事業に充てられ、そのうちの約半分が子どもたちへ基礎教育を提供するためのプログラムに費やされています。より多くの子どもたちがより継続した教育が受けられるよう、学校制度がルワンダ政府によって整えられています。

Mayange A 小学校→

ここでは幼稚園～セカンダリー3 年生(中学校)までの生徒が同じ敷地内で勉強をしている。



### ▶ ダブルシフト制度

学校数・教員数の制限により、ダブルシフト制度が採用されています。一日のうち授業が二部で構成されており、午前中に登校する生徒は 7:20~11:40 まで、午後は 12:40~17:00 まで授業を受けます。月曜の午前に登校した生徒は、火曜は午後、水曜は午前、といったシフトで回転します。マヤング地区の小学校では、この午前・午後の部の入れ替えの時間帯に学校給食を配膳しています。

### ▶ 9 年義務教育制度

2009 年、ルワンダ政府の決定により、これまでは小学校 1~6 年生のみで行われていた義務教育が、セカンダリースクール 1~3 年生まで延長されました。日本と同様に計 9 年間で義務教育となり、授業料無料で教育を受けられるようになったのです。これを受け、以前よりもセカンダリースクールへ進学する児童が増え始めているため、現在ルワンダ国内では校舎の増築や、教員の確保が目下の急務となっています。

このような国の政策のもと、より多くの子どもたちが学校へ通えるようになっていきます。その一方で、生徒の家庭からもサポートが必要とされています。まず、各家庭で制服を準備することが求められています(男子用 5,000 ルワンダフラン;約 9 米ドル、女子用 4,000 ルワンダフラン;約 7.2 米ドル)。制服を必ず購入しなければならないという明確なルールはありませんが、日本の小学校のランドセルのように、ルワンダでは制服を着用して授業を受けることが奨励されています。また、教科書以外に学校で使う文房具(ノート、鉛筆、定規など)も各々で準備することとなっています。農業から得られるひと月おおよそ 5,000 ルワンダフラン(約 9 米ドル)の収入で暮らしているこの地域の家庭にとって、子どもたちを学校へ継続して通わせることは、そう容易なことではありません。



↑ 小学校制服 男子生徒  
エリック・ハビヤリマナ君(小 6)



↑ 女子生徒  
アリス・トゥイシミーゼちゃん(小 6)



【学校給食運営の仕組み】

資金面以外のサポートでは、多くの生徒の親や地域住民たちが学校給食運営に携わっています。給食室の建設・管理から始まり、調理や食器の洗浄を行っています。また各家庭から調理用の薪を持参する人々や、より栄養価の高い給食を子どもたちに食べさせるために野菜を畑から持参する人々もいます。

### 3. 子どもたちの進路

現在では、マヤング地区の小学校に通う6年生のほぼ100%が、小学校を卒業するための国家試験を無事合格し、9年義務教育制度にのっとりローワーセカンダリー（中学校）へと進学しています。そのままマヤング地区のほぼ全ての子どもたちがローワーセカンダリーへ3年間通い、無事義務教育課程を修了します。その後アッパーセカンダリー（高校）へ進学した生徒は学業を継続し、その他の子どもたちは、家庭で行っている農業や自営業を手伝ったり、新たに自ら商店や自転車修理工のような自営業を開始したりします。アッパーセカンダリーでの教育3年間を終え無事卒業した子どもたちは、主に地域小学校の教師や、地方自治体公務員、警察官や軍人となっていきます。また、アッパーセカンダリーを卒業した生徒のうち少数の子どもたちは、国からの奨学金を受けながら、大学へ通うようになります。ルワンダ国内で大学を卒業している人は一流のエリートとみなされ、大学卒業後は国家公務員や国際NGOの職員などになります。同時に、ローワーセカンダリー卒と比較すると、格段に職業選択の自由が持てるようになります。

【最終学歴による、職業・平均収入の違い(1人あたり)】



	中学校卒	高校卒	大学卒
主な職業	農家、自営業(商店主など)	小学校教師、地方自治体公務員、警察官、軍人など	国家公務員、国際NGO職員など多様
月平均収入	500~1,000Rwf	30,000Rwf	120,000Rwf以上

※558Rwf(ルワンダフラン)＝約1米ドル

TFTでの学校給食プログラムを通して、より多くの子どもたちが、自分が生まれた境遇によってではなく、自分の力によって将来の夢を叶えられる機会を持てるよう、これからも学校給食を届けてまいります。

#### 【参考】

Ministry of Education, Republic of Rwanda: <http://www.mineduc.gov.rw/>

UNICEF: [http://www.unicef.org/esaro/5440\\_Rwanda\\_education\\_review.html](http://www.unicef.org/esaro/5440_Rwanda_education_review.html)

#### 4. TABLE FOR TWO スタッフの所感

【TABLE FOR TWO 事務局スタッフ 安東 迪子】



日本からアフリカへ 24 時間の旅は、当たり前だが遠かった。赤茶色の大地、水汲み用の黄色いタンクを持って山道を黙々と登る人々、鮮やかな布を身にまとった美しい女性たち。異次元に迷い込んだような錯覚に襲われながら、首都キガリからさらに車で行くこと1時間弱。ようやくマヤンゲ村の子どもたちに会うことができた。

今回の視察では、学校だけでなく休日に村内の家庭を二軒訪問することができた。この村の中にも貧富の差はあり、貧しい方の家庭では両親がおらず、祖父母がなんとか子どもたちを育てている状況。

子どもは制服以外の服を持たないので、休日もずっと制服を着てい

た。私たちのインタビューに対しても、しばらくは緊張した面持ちで言葉少なに答えていたが、将来の夢を尋ねた瞬間に笑顔になって「英語の先生！」と答えてくれた。自給自足で生活しており現金収入がほとんどない中、制服だけはどうしても買ってあげたいと、食事量をきりつめて捻出した食材をマーケットで売り、現金にしたとのこと。このような状況下で給食費まで負担する余裕は当然無く、TFT の給食の意義は本当に大きい、と感謝の言葉をいただいた。

帰り際、現地スタッフに「こんなに食べ物がない状況で子どもたちは辛かっただろうね」と言ったら、「僕もこの村の出身だけど、生まれた時からずっと食べ物はなかったから、辛いという気持ちはなかったよ。ただ、栄養をとっていないと抵抗力がつかなくて、伝染病が流行ったりしたらみんな死んでしまうから、それが問題なんだ」という返事が返ってきた。この人々の生活について、自分のものさしでは測ることはできない、と頭では分かっていたにも関わらず、この言葉には衝撃を受けた。彼は呆然とする私に向かって、それよりも給食が突然なくなる方が辛いよ、と続けた。「一度始めたら絶対に途中で投げ出してはならない」という支援活動の鉄則を改めて心に刻み込んだ。

【TABLE FOR TWO 事務局インターン 笹本 愛子】



今回の視察で最も印象に残っているのは、やはり子どもたちを支える親たちの姿勢である。私がこれまで会ったアフリカで暮らす人々は、“Don't worry, be happy”パーソンが多く、将来のことより、今日という日をどう生きるかを重視している人が多かった。そうせざるを得ない環境の人も多かった。しかし今回会った親たちは、決して余裕があるとは言えない生活の中、子どもたちの将来についてとても深く考えており、彼らのよりよい未来のために自分ができることを行おうと努力をしていた。私たちは「支援」という言葉をよく使うけれど、私たちはアフリカに暮らす人々を「支援」しているのではなく、彼らと一緒に

なり同じゴールに向かって進んでいるのだ、ということを強く感じさせられた。



**TABLE FOR TWO** かわら版 補足資料  
～日本での実施状況～

参加組織

⇒ 計 357 の組織で実施中  
(2010 年 12 月 6 日現在)

内 訳	団体数	割 合
1. 企業	169	47%
2. 学校	61	17%
3. 店舗、小売食品	67	19%
4. 官公庁、公的機関	26	7%
5. 病院	9	3%
6. その他	25	7%
計	357	

これまでに送った寄付金

● 2008 年末までの送金分

340,572 食分(約 1,550 人の子どもの 1 年分の学校給食)

※ 2007 年 2 月のテスト実施分から 2008 年 9 月分まで

● 2009 年末までの送金分

1,704,187 食分(約 7,750 人の子どもの 1 年分の学校給食)

※ 2008 年 10 月分から 2009 年 9 月分まで

● 第 8 回送金 2010 年 3 月 19 日

854,125 食分(約 3,900 人の子どもの 1 年分の学校給食)

※ 2009 年 10 月分から 2009 年 12 月分まで

● 第 9 回送金 2010 年 7 月 16 日

1,518,174 食分(約 6,900 人の子どもの 1 年分の学校給食)

※ 2010 年 1 月分から 2010 年 6 月分まで

● 第 10 回送金 2010 年 11 月 20 日

1,958,773 食分(約 8,900 人の子どもの 1 年分の学校給食)

※ 2010 年 7 月分から 2010 年 10 月分まで

⇒合計 6,375,831 食分(約 29,000 人の子ども 1 年分の学校給食)